

宥快の菩提心観について

林 山 ま ゆ り

はじめに

菩提心は広く諸經典において説かれるものであり、その解釈は一樣ではない。東密においては一般に『大日経疏』・『菩提心論』の所説に随い、菩提心を解釈してきた。

しかし、『菩提心論』は、作者・制作年代が不明な論書であり、その内容についても、早くに徳一（一八一四）の『真言宗未決文』によっていくつかの失が挙げられたように、様々な教学上の問題を含む論書である。また同時に、不空の訳として伝えられる菩提心に関する論書には、『菩提心義』があり、この論書に見える菩提心説をどう扱うかということが、東密の諸学匠の課題となった。

小稿では、宥快の『発菩提心論鈔』を中心に、宥快（一三四五～一四一六）の菩提心観について検討する。本書は至徳四年（二三八六）夏の談義を収録したものであり、宥快が四三歳の時の著作である。本書の特色としては、他の宥快の著作と同

様に、宥快以前の学者の異議を列挙していることが挙げられる。

一 顕密通相の菩提心観

宥快の菩提心観の特色として、まず、顕教の経論類を用い、菩提心の行相について詳細に論じていることが挙げられる。『発菩提心論鈔』巻一には、次のように記されている。

一、菩提心事 凡^ソ菩提心^ト者、一心^ノ本性、万行^ノ根源也。顕密雖^モ不同^{ナリト}、共^ニ歎^ズ菩提心^ノ功德^ヲ。不空^ノ菩提心義^ニ云、菩提^ノ之心^ハ、成仏之本^{ナリ}。發起之相^ハ、具^ニ在^リ衆經^ニ。大事^ノ因縁莫^シ過^ル於此^ニ。欲^ラモハバ、將^ニ修覚^{セント}不^レ可^レ不^レレ^バアル知^ラ。文 法相^ノ大乘入道章^ニハ立^テ菩提心集^ノ十門^ヲ明^ス菩提心^ノ相^ヲ。華嚴^ノ清涼^ハ菩提心^ニ略^{シテ}出^ス心体[・]心相[・]心徳^ノ三種^ヲ。

ここでは、菩提心とは顕密で異なる解釈をするものの、共通して讃歎するものであると述べ、さらに、菩提心の具体相を挙げている例として、不空の『菩提心義』、法相の『大乘入道章』、華嚴の清涼澄観の説を挙げている。

この三種の論書のうち、『菩提心義』は、不空の訳と見做されているため、一見、密教の菩提心について述べている論書のようにある。しかしながら、その内容は、大部分が顕教の経論類を引用して造られていること(2)から、古来、台東両密の間で作者の真偽が問われてきた(3)。宥快の『菩提心義』に対する見解は以下の通りである。

不空ノ菩提心義ニハ立テテ五門ノ明ニ菩提心ノ義相ヲ。彼ノ釈ニ云、随レ所見聞スル略シテ弁ゼバ其相ヲ菩提心ノ義ニ五門ノ分別アリ。一ニハ釈ニ名義ヲ、二ニハ識ニ体性ヲ、三ニハ弁シ一異ヲ、四ニハ明ニ相成ヲ、五ニハ述ニ行願ヲ文御釈大都常途符順ノ釈ノ意也。付レ之ニ古来ノ一義ニ、三蔵所訳ノ菩提心論ニ顯ニ密蔵肝心ノ菩提心ノ義ヲ故ニ、秘密義ハ讓ニ彼論ニ、菩提心義ニハ釈ニ顯密通相ノ浅略ノ一辺ヲ取レ義ヲ。

『菩提心義』の五門の菩提心の義相は、常途の顕教の釈と合致すると述べた上で、『菩提心論』を密教の菩提心について論じたもの、『菩提心義』は顯密通相の浅略の説を述べたものとして扱うという古来の一義を挙げ、この古来の一義を採るといふ立場を示している。

このことから『發菩提心論鈔』の三種の論書は、ただ顕教の説としてではなく、いずれも顯密通相の菩提心の説として挙げられたものであると理解することができよう。

宥快が顯密通相の説として挙げる法相の入道章とは、法相宗第三祖である智周（六六八〜七二三）の『大乘入道次第』を指す。宥快は『大乘入道次第』を用いることについて、次の

ように述べている。

又法相ノ入道章ニ立テテ十門ノ分別スル菩提心ノ義ヲ中ニ、第三ニ明ス行相ヲ。彼ノ意以テ上求下化ノ心ヲ菩提心行相トス。是レ即依レ瑜伽唯識等ノ所判ニ。当論ノ訳者不空ニ三蔵ハ多ク被レ用ニ新家性相ヲ。然レハ者菩提心ノ行相ナリト云事、旁分明也。

すなわち、『大乘入道次第』の発心の十門中に「三、顯行相」という項目が見え、菩提心の行相が説かれているということ、また、法相の釈を用いることについて、不空は新家の性相学の釈を多く用いるので、法相の釈を依用しても問題はなことを説明している。この『大乘入道次第』では、「三、顯行相者、希求為レ相。希求有レ二。一、求菩提。二、求利生。（中略）此等諸教皆以三決定希三求二利」、為三發菩提心之行相。」として、菩提心の行相とは、菩提を求めること、衆生を利益することの二種が伴うことであると説いている。

また、澄観の説とは、『華嚴經行願品疏鈔』卷二に見える菩提心の相の解釈である。澄観の解釈とは、『起信論』の成就発心の三心を踏まえたうえで、心体・心相・心徳という三種の相を示すというものであり、宥快はこの澄観の説を援用して、『菩提心義』の菩提心説を解説している。これは『菩提心義』が顕教の経論類、とりわけ『華嚴經』や『起信論』を引用していることから、澄観の説は不空の説と相違しないと判断したためであろう。

以上のように、宥快は、顕密通相の菩提心観については、『菩提心義』の説を基に、不空の思想と相違しない法相や華嚴の論を援用しながら解説している。

二 密教の菩提心

東密においては、基本的に『菩提心論』の行願・勝義・三摩地の三種菩提心、『大日経』の「菩提心を因と為し、悲を根本と為し、方便を究竟と為す」と言う三句の法門を典拠として、密教の菩提心観を形成する。これらは同じ「菩提心」を説いたものと見做されることから、三種菩提心と三句の法門がそれぞれに配当され理解されるようになった。中古の学匠である重誉（一四一）は、『秘宗教相鈔』において、三種菩提心と三句を次のように配当している。

問、爾者以二大日経所説菩提心為因大悲為根本之二句一菩提心論所説三種菩提心中如何判三属之一乎。答、依三経疏意一思三経所説二句論所陳三心之相撰。菩提心為因者唯撰三勝義菩提心。大悲為根本者兼取三行願・三摩地二心也。

ここでは、勝義を「菩提心為因」の句に、行願・三摩地を「大悲為根」の句に配当して解釈している。この重誉の説は後に、海慧の『密宗要決鈔』にも収録され、注目されていた説であったようである。しかしながら、鎌倉期以降は重誉の説はほとんど重視されなくなり、替わって勝義を「菩提

宥快の菩提心観について（林 山）

心為因」、行願を「大悲為根」、三摩地を「方便究竟」にそれぞれ当てるといふ説が主流となる。これは安然の『菩提心義抄』などにみえる説であり、東密でも道範（一一七八）一二五二・頼瑜（一二二六）一三〇四・杲宝（一三〇六）一三六二などの著作で用いられている。この説に対して宥快は、『発菩提心論鈔』に「又三種菩提心三句配釈ノ事一義云、勝義ハ菩提心ヲ為レ因、行願ハ大悲ヲ為レ根、三摩地ハ方便究竟ト分別ス。安然等同レ之。一義云、三種ノ菩提心各ノ通シテ三句一取レ義。」¹⁰⁾と言及している。ただし、宥快は一義の一つとして挙げるのみであって、自身がどちらの義を取るかについては述べてはいない。つまり、宥快が積極的にこの説を採用していたかどうかは判然としない。さらに、以下のような記述から宥快は安然等の説を採っていないかたではないかと考えることができる。

大日経ノ意、分ニ別シテ菩提ノ実義ト・成仏ノ外迹トヲ、以ニ菩提ノ実義ト為ニ自証ト、以ニ成仏ノ外迹ト為ニ化他ト。説ニシテ彼ノ菩提実義ヲ、我覚本不生^等。文 是則以ニ六大法界一為ニ菩提体ト意。覚ニ知ニ十界ノ依正色心ノ実相悉ク六大法界ノ体性也ト、発菩提心ト可レ得レ意。疏ニ釈シテ一向志求一切智智、必当普度法界衆生ト、以ニ上求下化ノ心一為ニ菩提心ト。是ハ正ク約スル義用ニ也。当論ト一具ニ得レ意合セハ、彼ノ菩提ノ実義ハ当ニ第三菩提心、一切衆生本有薩埵普賢ノ身心ニ。一向志求一切智智ハ勝義ノ菩提心、必当普度法界衆生ハ行願ノ菩提心也。所詮覚ニ知ニ自身他心一如ニシテ、六大法界ノ体性也ト。此上ニ発ニ上求

下化^レ二利^ノ心^ヲ自宗^ノ發心^ト可^レ得^レ意也^{（11）}。

宥快は『大日經』には菩提の実義と成仏の外迹が説かれて
いるとし、菩提の実義を自証、成仏の外迹を化他であるとす
る。この菩提の実義とは、十界の依正・色心の実相である六
大法相の体性であるとし、六大法界がそのまま菩提であると
覚知することが、真言宗の發菩提心であるとする。これは、
顕密通相の菩提心相である上求下化を満たした上で、さらに
自証を加えたものであると見做すことができ、ここから宥快
は、顕密通相の説を踏まえた上で、密教の菩提心観を理解し
ていたということが言えよう。

また、このような菩提心の解釈を踏まえ、三種菩提心と『大
日經』の文句との配当も従来とは異なる説を出している。す
なわち、三句の法門の句には当てず、「具縁品」の經文や疏
の文に当てて解釈するのである。具体的には、勝義菩提心
は上求を意味する「一向志求一切智智」、行願菩提心には下
化を意味する「必当普度法界衆生」、三摩地菩提心には「菩
提の実義」をそれぞれ配当している。「菩提の実義」は文中
の説明より『大日經』具縁品の「我覺本不生」の文に当たる
ことは明らかである。

最後に、宥快が三種菩提心と三句の法門との配当を重視し
ない理由について考えてみたい。『發菩提心論鈔』には、遮
情の菩提心について次のように述べている。

若^シ約^{セバ}遮情門^ニ、疏家^ニ釈^{セラル}經^ノ無相^ノ菩提^ヲ時、坐^{スル}於^テ諸法^ノ寂
滅^ニ即是^レ菩提^{ナリ}。非^ニ已成[・]今成[・]当成^ニ。無^ニ法可^レ觀^レ。不^ニ從^テ
他^ニ得^一。當^レ有^ニ何^ノ相^カ乎^一。此^ノ菩提^不可^レ說^ヲ以^テ示^ス人^ニ。文^又
大日經^ニ說^ク秘密主[、]是^阿耨^多羅^三藐^三菩提[、]乃至^彼法^少分^無有^レ
可^レ得^等。皆^是遮情^ノ菩提^心也。故^ニ大師^以心^非青^非黃^等ノ文^ヲ、
此^レ遮^心非^ニ顯^色ニ文^{。遮情}淺略^ノ一^辺事^明也^{（12）}。

この文中の波線部分は『大日經』からの引用であり、三句
の法門の直後の部分に見える語句である。⁽¹³⁾この「無相菩提」
などの語句は遮情の菩提心を表しているとし、宥快はその根
拠として、『十住心論』がこれらの無相菩提の文を第八住心
の証文として用いていることを挙げている。『十住心論』第
八住心には次のように見える。

謂^ニ無相[・]虛空[・]相及[・]非青[・]非黃^等言[、]並^是明^ニ法身^{真如}一道^{無為}之^真
理^一。仏^說此^名初^法明^道。智^度名^入仏^道初^門。言^仏道^者、指^ニ金
剛^界宮^大日^曼荼^羅仏^{。於}諸^顯教^是究^竟理^智法^身。望^ニ真^言門^一
是^則初^門。

すなわち、無相虚空相を示す『大日經疏』の文は、顕教に
おいては究極の理智法身と見做されるものであるが、真言門
では初門に過ぎないと見做しているのである。この説を踏ま
えた「無相菩提」を遮情の菩提心とし重視しないという宥快
の態度は、安然の四重秘釈を批判する箇所にも見える。

安然は『菩提心義抄』で宥快と同様に『菩提心義』を淺略
釈に位置づけるといふ四重秘釈を示している。⁽¹⁵⁾しかし、宥快

はこの安然の四重秘積を認めず、安然の第四重の秘積は第二重に置くべきという見解を示している。¹⁶⁾これは、東密の解積からすると、安然の第四重の積が、真如を以て体性とする、『華嚴』・『法華』の教えに他ならず、密教に入る以前の積であると見做すことができるからである。

以上に宥快『発菩提心論鈔』に見える菩提心観を検討してみた。宥快は、積極的に不空訳と見做される『菩提心義』を用い、まず、顕密通相の菩提心の相を提示し、その上で自身の菩提心観を述べている。宥快の菩提心観はただ伝統説に依りて解釈するだけではなく、顕密通相の菩提心相を踏まえた上で、自宗の菩提心を解釈するところに特徴があるといえよう。

1 真全八・二三三頁下。

- 2 『菩提心義』に引用される経論類について、安然は『菩提心義鈔』で以下のように挙げる。「問。此文是誰説耶。答。真言目錄並云、不空私檢二文論是龍樹造不空訳也。菩提心義無造主名。而古德皆云不空造者有疑也。問。疑何。答。文中唯引華嚴・維摩・虚空藏・菩提心經・本業・仁王經等、起信・顯揚論等、明顯教菩提心。非真言菩提心。又引長耳三藏説、亦非真言三藏説。唯一処引大日經疏故有疑也。問。既引毘盧遮那經疏何言非真言義耶。答。大日經義積亦名義記是一行記。何以不空三藏引為証乎。」(大正七五・四五二頁中)。
- 3 東密では不空訳であることを認め、台密の安然等は、不空訳の論書として認めないという立場をとる。

宥快の菩提心観について(林山)

- 4 真全八・二三三頁下。
5 真全八・二六四頁下。
6 大正四五・四五二頁中。
7 大正四五・四五三頁上。
8 大正三二・五八〇頁下。
9 大正七七・六〇三頁中。
10 真全八・二七四頁下。
11 真全八・二三三頁上下。
12 真全八・二三三頁下。
13 大正一八・一頁中下。
14 大正七七・三五二頁上。
15 大正七五・四五八頁下、四五九頁上。
16 真全八・二三三頁上。

〈キーワード〉 宥快、菩提心、『発菩提心論鈔』、『菩提心義』

(早稲田大学助手)